# 万内川登録文化財（一号～四号）探検マップ

## 見　晴　台　　1

この見晴台の場所は、背河原（セガラ）耕地と呼ばれた耕作地でしたが、明治 35 年の山のげの土石流で 30m 近い土砂が堆積しました。

上の写真が完成直後の一号堰堤（大正 10 年頃）です。下の写真は、ここから見える現在の一号堰堤です。二つの写真を見比べてみてください。昔の写真は周辺の荒廃が著しいですが、現在は緑豊かになっています。

万内川 1 号堰堤

## 登録有形文化財　万内川三号堰堤

当初は石だけの空石積みでしたが、昭和初期にセメントを入れ補強しました。

この堰堤だけが、外見上当時の西野谷現地の石のままの堰堤です。現在ある万内川砂防堰堤のなかで、特に価値があります。

登録有形文化財万内川 3 号堰堤

## 登録有形文化財　万内川四号堰堤

二段の堰堤からなり、その間の水たたきを石張りとしています。右の岸を曲線状に石積み護岸でつなげています。

登録有形文化財万内川 4 号堰堤

## 登録有形文化財　万内川一号堰堤

3 年の歳月をかけ、すべて現地の巨石を割り、地元の人たちの手によって造られた新潟県初の砂防堰堤です（大正 10 年頃建造）。

当時の高価なセメントを使用した砂防堰堤で、日本の中では初期のものです。

登録有形文化財万内川 1 号堰堤

## ☆コラム１

### 「明治 35 年粟立山の大崩壊」

「山のげ（山崩れ）当時は米のひとつぶもとんね（とれない）家は、本田の七割くらいあったろうね。家ば持てるようになったな（なったのは）やっぱり七～八年もかかったんだねぇかね」･･･多くの田畑と家々をおそった粟立山崩壊の被害を物語る、渡辺森市さんの話です（『西野谷 80 年のあゆみ』より抜粋）。

明治 35（1902）年 5 月 19 日に妙高市（新井）の粟立山が大崩壊を起こし、万内川と日影沢を埋め尽くしました。やがて土石流となって、下流の西野谷集落をおそいました。集落の半分以上が流され、ほとんどの田畑が失われました。

西野谷集落より崩壊地を望む

## ☆コラム２　「新潟県砂防発祥の地　万内川」

大正 10 年、尊い人命と田畑を土石流から守るため、新潟県により県内初の砂防工事が始まりました。当時は西野谷集落の民家を借りて事務所とし、職員は集落各戸に分宿して施工・監督にあたりました。

機械のない時代、近隣集落の人々は工事人夫として働きました。

西野谷集落の砂防事務所前にて

## ☆コラム４　「むすめ達も 50 kgのセメント２袋運ぶ」

女の人でも５０kgのセメントを、２袋はせおって運んだといいます。

50 kgのセメント 2 袋をせおう娘

ジャリ 2 箱を担ぐ娘達

## 見　晴　台　　2

ここからは、登録有形文化財万内川 6 号、7 号、8 号堰堤が、階段状になって見えます。

その当時の砂防工事は、高さの高い強固な砂防堰堤づくりと、万内川のような階段式の堰堤づくりの方法がありました。万内川では、当時の日本における最新の砂防技術を導入し、欧州にルーツのある階段式堰堤群が導入されました。貴重なセメントを 1 号、2 号堰堤に使い、その他の堰堤は、空石積みとしました。

万内川砂防堰堤群は、日本の中で、コンクリートを基盤にした階段式堰堤群の最初に完成したものです。

登録有形文化財
万内川 6 号･7 号･8 号堰堤

## 万　内　川　砂　防　公　園

万内川砂防公園は、妙高砂防事務所が、平成元年（1989 年）ころから、この万内川の砂防施設の価値を認め、①砂防施設を保存活用する②砂防施設を紹介する　場として、平成 8 年（1996 年）ころより整備しました。

万内川の砂防模型を兼ねた水遊び場、周辺の自然や清流を活かした親水広場、軽運動やピクニックに利用できる多目的広場などがあります。

## ☆コラム３

### 「石運びも地元の力で」

万内川登録堰堤群には数多くの石が使われていますが、石工が河原で割った割石や、セメントを運ぶ「石背負い」や「モッコかつぎ」は、地域の人たちの人夫の仕事でした。

むらがつぶされた･･･
子どもと遊んでやることもなく
来る日も来る日もただ働いた
炭窯の青い煙が、生活の証し
肩のコブは
川原で石を担いだ勲章さ

あれから一世紀　いま･･･
つらかった昨日がうそのようだ
今度は子どもや孫に
いい思い出を残して
やらなくちゃ　なー